

ブレスレスなドレス



着物リメイクドレスを着て講演。能楽堂が会場でした

とチャレンジしなかったと思えば、よい機会を与えてくれたドレスとの出会いに感謝するしかないでしょう。

ドレスのデザイナー、若槻せつ子さんによれば、この着物地には鼓や笙が描かれており、能楽堂にぴったりのモチーフとのこと。ゴールドのアクセサリーを貸してくだ

さつたのですが、金は「邪気を払う」効果があるのだそうです。嫉妬を受けやすい結婚式の背景が金屏風なのも、そのため。祝いの席に向ければちな悪い感情を追い払うという効果があるらしい。「靴も金色にしていきなさい」というご助言にも素直に従いました。

さて、かくなるうえは楽しむしかない。決めた能楽堂の舞台、靴はNGで足袋をはいて上るのですね。橋掛の入り口には五色の幕があり、登壇の際には二人の方がくるくると幕を巻き上げてくれ、その下を通過して舞台中央に向かうのです。ドレス

丈は靴のヒールの高さにあわせてあったために足袋だと裾をひきずるので、能の舞台ではかえってその引きずりがよかったと好評でした。

このような希少でブレスレスな(固唾をのむ)体験をさせていただくことができ、努力の甲斐がありました。結果として講演料の数倍の経費がかかってしまったので、友人にはクレイジーだと呆れられましたがいや、時にクレイジーにならないと手に入らないお宝もあるのです(と言いつつ)。

さて、肝心の講演の内容は、来春、共著として出版予定です。こちらもクレイジーにならないとゴールに届かないスケジュールですが、ここで公表したのでやるしかありません。まずは、やると「決める」。次は行動あるのみ。息をしている時間の長さよりもむしろ、没頭してきた時間の深さが人を作る、と信じて頑張りしかなさそうです。というか、着物ドレスを着ている間は、シルエットを作るタイトな下着のために、ほとんど息ができなかつたんですよえ。

読者のみなさまは、もうすっかりお忘れていらつしやると思うのですが、3か月前の本欄で「能楽堂での講演で着物リメイクドレスを着る」宣言をしておりまし。

モデルサイズで作つてあるドレスのためにマイナス15センチのサイズダウンを命じられ、講演のためのコンテンツを用意しつつドレスのための身体作りをしなくてはならないという厳しいミッションを自分に課し、なんとか無事にやりきりました。9本の連載とそれに伴う取材、企業のアドバイザー

の仕事の合間を縫ってジムに通うという綱渡りの日々でしたが、「着る」と決めればなんとかなるものですね。食事を特に制限しなかつたので体重は微かに減っただけでしたが、長い間放置されていて冬眠状態だった全身の筋肉が覚醒してよみがえったという感じで、なんとかドレスに身体が入るほどには引き締まりました。涙ぐましく頑張ったつもりではありましたが、ジムの先生いわく、「これで、ようやく人並みですね」。かくも過酷な世界でしたが、こういう機会がない

なかのなか

1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。経産省「ファッション未来研究会」委員。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「『イノベーター』で読むアパレル全史」(日本実業出版社)、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」(吉川弘文館)ほか多数。